

「人間」「人生」「世の中」の特殊主題化用法

杉本和之

(日本語日本事情研究室)

1. はじめに

本稿でとりあげる「人間」「人生」「世の中」の用法は、いずれも「X、～。」の形態をもち、経験的に人生訓、処世訓、或いは人間観、人生観、世界観を説く、次のような文が対象となる。

- (1) 人間、我慢が肝心だ。
- (2) 人間、一人じゃ生きられない。
- (3) 人生、山あり、谷あり。
- (4) 人生、死ぬまで勉強だ。
- (5) 世の中、金次第さ。
- (6) 世の中、広いようで狭い。

どちらかといえば書き言葉よりは話し言葉・会話で用いられることが多いが、

- (7) 人生、夢の如し。
- (8) 人間本来無一物。

や(3)のように、スタイルとしては文語体、もしくは漢文調で用いられる場合もある。また、(8)のように、「X、～。」でなく、読点を省略した形も時に用いられる。

このような特徴をもった用法は、現代日本語でも他の名詞にはほとんど見られない独特のもので、注目に値する。以下、この用法の文法的、表現論的特徴を分析してみたい。

先行文献に関していえば、「人間」「人生」「世の中」という語の、このような用法を対象とした論稿は見られない。

なお、以下の例文の出典は次の通り。

(子別れ)「子別れ」『古典落語体系第二巻』三一書房 責任編集一江國滋・大西信行・永井啓夫・矢野誠一・三田純一

(紀州)「紀州」『古典落語体系第四巻』同上

(品川)「品川心中」同上

(失) 渡辺淳一『失樂園』講談社

(鬼平) 池波正太郎『鬼平犯科帳7, 8』文春文庫

(ゆっくり) 大西良慶『ゆっくりしいや』PHP文庫

(面目) 藤本義一『面白く生きる心得』青春出版社

- (花束) 東京ペン倶楽部編『人生を支える名言の花束』青年書館
(生命) 村田英雄『生命あってこそ』近代映画社
(新社長) 朝日新聞1996. 8. 8. 朝刊「96新社長」欄 ジャガー・ジャパン福田晴好氏の紹介
(名言) 矢沢永一『名言の智恵人生の智恵』PHP研究所
(勝負) 田中真澄『人生、勝負は後半にあり』京都PHP研究所
(神経痛) 花島浩監修『神経痛の治療と食事』高橋書店
(日録)『週刊日録20世紀1974』講談社
(自然) 桜井晴美編『自然な日本語—中級用会話教材』さかまち企画
(ちよつと) 朝日新聞1982. 2. 5. 朝刊「ちよつとひとこと」欄
(阿呆) 芥川龍之介『或阿呆の一生』講談社 日本現代文学全集56 芥川龍之介集
(侏儒) 芥川龍之介『侏儒の言葉』講談社 日本現代文学全集56 芥川龍之介集
(黄門) TBS TV『水戸黄門』主題歌 山上路夫作詞
(殺人) フジTV1997. 6. 14. ドラマ「経理課峯松係長の犯罪・事故か殺人か? 社内連続
変死事件」せりふ
(終) テレビ朝日1996. 11. 21. ドラマ『終又三郎』せりふ

ちなみに最後の3つは、テレビ放送から直接採集した。音声による採集であって、文字表記は筆者=杉本による。この用法の出典はかなり偏りがある。新聞・雑誌の報道文や小説の地の文等にはほとんど使用されていない。あまりにも日常的で常套的な表現であるということで回避されたのか、小説のセリフにもほとんど現れない。よく現れるのが、落語、会話体スタイルの人生論もの、あるいはテレビ番組出演者の生のコメント、あるいはテレビドラマの中でのセリフである。なお、上記、芥川龍之介の2作品は、この用法の出典ではない。

2. 文法的成立条件

名詞「X」が、文中で「X、～」として助詞抜きで用いられるのは次の6つのケースである。

①呼格：呼びかけの場合。

(9) 先生、おはようございます。

(10) 吉田さん、この荷物運んで下さい。

②並列：複数の名詞を並べる場合。

(11) 日本、中国、韓国の3か国によるリーグ戦を行う。

(12) 醤油、塩、胡椒、みりんを調味料として使う。

③同格：同格の名詞の言い換えの場合。

(13) 新社長、山口勇作が皆様方に一言御挨拶申し上げます。

(14) 経済大国、日本の将来像を占ってみよう。

④副詞的用法：時や数を表す名詞等が副詞として使用される場合。

(15) 朝、タクシーに乗って箱根に出かけた。

(16) 一生、家には戻らない。

(17) 明治時代、東洋人の顔には^{ほうそう}疱疹の痕が出ているのが多かった。(ゆっくり)

(18) 3か月、山に籠る。

(19) 200人, 社員を減らす。

(20) 事実, 山田は高木にしつこく保険の加入をせまっていた。

常識的に考えて, 「人間, ~。」「人生, ~。」「世の中, ~。」が, 上の①~④の用法だとは考えにくい。後で述べることにするが, 強いていえば, (20) 事実, ~。の副詞用法との相似性の可能性が残る。

⑤格助詞の省略: 会話文におけるガ, ヲ, ヘ等の省略の場合。

久野(1973)は, 格助詞ガの省略に関して, “主語の後に省略されている助詞は, 一般に, 主格を表す「ガ」であると考えられて来た。しかし, これは誤った分析であると思われる。”として, “主文の主語をマークする「ガ」は, 会話文でも省略することができない。主文に助詞を伴わないで現れる主語は, 全て「ハ」の省略の例である。”とする「仮説3.」をたてている。しかしながら, 次の例文(21)(22)を見ると, 会話文において, やはりガの省略の例も存在すると認めざるをえない。これらは明らかにハでなくガの省略である。

(21) あっ, 雨, 降ってきた。

(22) おい, ネクタイ, 曲がっているよ。

以下の例文は, 格助詞ヲ, ヘの省略の例文である。

(23) もっとビール, 飲みなよ。

(24) じゃ, 今から, 住友銀行, 行こう。

⑥ハの省略: 会話文で主題を表すハが省略された場合。

(25) 僕, 全然知らないよ。

(26) お父さん, どこへ行ったんだらう。

(27) おお, このラーメン, うまいな。

「人間/人生/世の中, ~。」の用法は, ⑥ハの省略に最も近い。格助詞ガの省略とは考えられない。冒頭に挙げた例文(1)~(8)はいずれもガを挿入すると非文になる。ハを入れると, (3)(8)がやや不自然になる外はだいたい成立する。(3)は述部が文語体, (8)は述部が漢文体のため不自然になったと思われる。

(1 a) 人間は我慢が肝心だ。

(2 a) 人間は一人じゃ生きられない。

(3 a) ? 人生は山あり, 谷あり。

(4 a) 人生は死ぬまで勉強だ。

(5 a) 世の中は金次第さ。

(6 a) 世の中は広いようで狭い。

(7 a) 人生は夢の如し。

(8 a) ? 人間は本来無一物。

「人間/人生/世の中, ~。」という構文が, 単に主題のハの省略であるのなら, 他の名詞Xを使った「X, ~。」の文, 即ち(25)~(27)の文と同種となり, その独自性は認められないという結果になる。再度(1 a)~(8 a)を子細に検討してみよう。ハのない元の文(1)~(8)と比較してみると, (3)(8)を除いた, 成立した文でも内容が論理的・分析的となって, 文の勢いが損なわれていることが分かる。ハを用いることによって, 絶対的範疇として確立していた「人間」「人生」「世の中」という対象が, 他の対象と同レベルに引き下げられ, 文全体としても人生訓, 処世訓としての直截性が失われている。

次に(25)～(27)の会話文でハが省略された通常の文と、(1)～(8)とを比較してみると、述部の種類が異なっていることが分かる。(1)～(8)の「人間／人生／世の中、～。」の文は、先述したように、人生訓、処世訓、或いは人間観、人生観、世界観を説く文であるため、「人間／人生／世の中というものは、こういうものだ。」という経験的に集積された究極の真理を述べるという形態をとっている。これに対して(25)～(27)の文では一回限りの事実を述べているに過ぎない。述部が、複数の事態の観察の凝縮された性格をもつか、一回限りの事実の観察の結果によるものかという、大きな相違点が見られる。これをテンスの面から捉え直せば、(1)～(8)の述部はいずれも、過去・現在・未来の特定の時点の表現ではなく、いわゆる一般時のテンスを表している。そのため、この構文では、過去形の述部は使用できない。即ち、テンスの上で制約をもつ。これに対して、(25)～(27)の通常の文では、述部が特定の時点を表すことができる。又、厳密に言えば、頻度は小さいが、「やっぱり、勉強、つまんない。」のように、場合によっては一般時を表すこともある。従って、テンス上の制約をもたないということになる。

結局、「人間／人生／世の中、～。」という文は、ハの省略という基本的な性格をもちつつも、まず、「人間」「人生」「世の中」という、人生訓、処世訓、或いは人間観、人生観、世界観という内容を導きやすい名詞を文頭に置き、更には経験によって凝縮された究極的立言（テンス上は一般時）を述部に配するという独特の構造を有していることが分かる。この構造が我々日本人にとっては馴染み深いものになっているため、「人間／人生／世の中、」という文頭を聞くだけで、我々は人生訓、処世訓の文を予測できるのであろう。

このような助詞抜き主題化用法は、「人間」「人生」「世の中」と類似した語、例えば「人」「人類」「生活」「世界」「世間」「日本」「日本人」等の語を用いても成立しない。助詞ハ、あるいはトイモノハといった語句を必要とする。

(28) 人間／人生／世の中、正直に生きてさえいれば、きっといいことがあるはずだ。

(29) 人間／人生／世の中、何が面白いといって、～ほど面白いものはない。

この(28)に「人」「人類」「日本人」を使用することはできないし、(29)に「人」「人類」「生活」「世界」「世間」「日本」「日本人」を入れることもできない。又、経験的な一般論の対象となりやすいと考えられる「恋」「恋愛」「家族」「夫婦」「結婚」「仕事」「勉強」「学問」「病気」等の名詞も、同様にこの種の主題化用法をもたない。この「人間／人生／世の中、～。」という文の独特の用法を、「人間」「人生」「世の中」の特殊主題化用法と呼ぶことにしよう。

3. 「人間／人生／世の中、～。」の表現論的意味

前節で「人間」「人生」「世の中」という3つの名詞が特殊主題化用法をもつということを述べたが、何故この3つの名詞のみが特殊主題化用法をもつのであろうか。この課題を追求する参考としてもう少し具体例を挙げて考えてみよう。

(30) 人間、長い人生のうち、一度はガタが来るものです。(神経痛)

(31) 人間、ひとつ価値観さえ変われば、どのようにでも生きていける。(失)

(32) たとえば人間、姿より心、などという。(ゆっくり)

(33) 人生、勇気が必要だ。(黄門、主題歌)

(34) 人生、勝負は後半にあり。(勝負、書名)

(35) 憧れだけで生きてたら、人生、かならず狂いますな。(面目)

- (36) 金も豪邸も名前も仕事も、全部を手にてできればもちろんそれが最高だが、世の中、そう甘くはない。(生命)
- (37) 「世の中、あんな女ばかりじゃないんだから。次はきっと当たりくじをひくさ」(東京ペン)
- (38) 世の中、上には上がいる。

我々人間にとって、いかに生きるべきかという問題は、倫理的な面からも世俗的・打算的な面からも、共通最大関心事である。そして、我々は生きていく上で、「人間」という主体的枠組、「人生」という時間的枠組、「世の中」という空間的枠組という、3つの基本的な枠組によって規定されている。言い換えれば、我々は「人間」という限定された主体的制約性を背負って、「人生」という個別の時間的軌跡を、「世の中」という他者の集合体である空間的領域の中でたどってゆく。これは全ての人間に共通の、矛盾に富んだ実存的過程である。それゆえに、「人間」「人生」「世の中」については、古えより多くの人が話題にし、その本質がどのようなものであるか、どのように対処すべきかを論じて来ている。それが、我々人間にとっての共通最大関心事であるため、我々の言語使用においても、特に現代語の会話体において、「人間」「人生」「世の中」は他の名詞とは懸隔をなす絶対範疇として確立され、「人間／人生／世の中、～。」という独特のパターンができあがったものと思われる。

この「人間／人生／世の中、～。」という構文は、いずれも話者が自らの人生経験の中から獲得した結論を表現している。単なる一時的な印象・判断ではない。それは、この構文を、人生経験の短い小学生・中学生のような子供が使用しないということからも明らかである。もし子供が用いたとすれば、それは大人の口真似にすぎない。

この構文の文意は、大別すれば、「人間」「人生」「世の中」の本質規定と、主体的にいかに対処すべきかという当為論の二つになるであろう。上の例文、(30)～(38)で言えば、(32)(33)が当為論、残りが本質規定となる。但し本質規定といっても、本質がこうなっているのだからこうすべきだという、当為への示唆を含んだものが多いのがその特徴である。(34)(35)はその好例である。本質規定というと、例えば「人間は哺乳動物である。」という文が想起されるが、これらは科学的・分析的な思考によって獲得された命題であって、人生訓、処世訓としての示唆性もなく、この場合は助詞抜き表現には相応しくない。助詞抜きの「X、～。」という構文は、あくまでも経験によって得られた直観的な、実用性を志向した判断に対して用いられる。

文体に関していうと、やはり会話体の文が多い。(30)(35)は会話中の文ではないが、スタイルとしては会話体を採用している。会話体はリズムを重視することから、助詞抜きの「X、～。」の形態が好まれるのであろう。リズムの重視という点では、漢文調の文についても同様のことが言えるだろう。経験によって得られた直観的な判断といっても、文体が分析的・思弁的なものであれば、やはり助詞抜きの形態にはならない。次の文はいずれも芥川龍之介の有名なアフォリズムであるが、文体上、助詞抜きは無理である。

(39) 「人生は一行のボオドレエルに若かない。」(阿呆)

(40) 人生は一箱のマッチに似ている。重大に扱ふのは莫迦莫迦しい。重大に扱はなければ危険である。(侏儒)

これらは内容的にも逆説的で何よりも平易さが不足しており、「X、」の文体には向かない。

4. 「人間、～。」の意味・用法

この用法の中心となるのは、次のように、誰でも思いつくような、短く、口語的で、明解でリズムカルな常套句であろう。

- (41) 人間、諦めが肝心だ。
- (42) 人間、死ぬ気になれば何でもできる。
- (43) 人間、所詮は自分が可愛い。

「人間、～。」は三つの中では使用頻度が最も高く、様々な用法が見られる。上の(41)～(43)は、人間の本質、或いは心構えを一律、究極的なものとして描いているが、反対にその多様性を説くものもある。

- (44) 人間、十人十色だ。
- (45) 人間、いい時もあれば、苦しい時もある。

又、人間に共通した微妙な心理をも表現することができる。

- (46) どうも人間、迷うとなんでもそのとおりにきこえるようで、尾州公が天下取ると聞いたのもむりありません。(紀州)
- (47) ところが人間、見栄というものがございます。軽くひきうけたのでは安っぽく思われるじゃないかというやつで、……(紀州)

本質規定でなく、当為論として表現する場合は、「人間、～が一番／肝心／大切／必要／命だ。」等の形をとることが多い。

- (48) 「人間、平和が一番だ。」(花束)
- (49) 人間、思いやりが必要だ。
- (50) 人間、心が命。
- (51) ……人間、何事でもいいから、自分の志を立てたところを孜孜として勤めることが大切だと思う。(名言)
- (52) 人間、自分で自分を見つめて、改めていかねばならない。(ゆっくり)

「人間、～。」というパターンが確立されているため、逆にこの形態が不要な場合でも、修辭的手段として、文中に「人間」を挿入して、このパターンに近づけようとするケースも見られる。

- (53) 「この野郎、感心なんかするねえ。人間ちィちィ錢を貯めてどうしようてんだ。」(子別れ)
- (54) ……人間生身だから、どうせ一度は死にますから、またあの世でお目にかかります。」(品川)
- (55) 「どんなに考えたって、……人間、せっぱつまった時の考えが本音ですよ。」(終)

(53) の「人間」は構文上不必要なものである。「～てどうしようてんだ」は相手・二人称に向けて使用されるべき表現で、ここに「人間」が入るのは本来不都合である。にも拘らず強引に「人間、～。」というパターンを挿入させたものと思われる。

(54) 「……人間生身だから、」も、文の整合性からいけば、「……私は生身の人間だから、」とするのが本来の文の形態であろう。

(55) の「人間、」もここに入るのは、本来の構文からすればおかしい。もし入れるとすれば、「～その人の本音ですよ。」の形が普通であろう。それを表現的な効果を狙って「人間、」を挿入

したものと思われる。

(53)～(55)のいずれも、一人称、二人称、ないし三人称の個人が話題の対象であるべきところに、範疇名詞としての「人間」が使用されている。論理的に言えば、「人間は本来こういうものだ/こうすべきだ」という本質論・当為論が個人を論ずる場合にも自然に浸透してしまったということであろう。このように、かなり自由に「人間」という語が文中に挿入できるという事態を認知するということになると、今度は自由に挿入できる「人間」という語は、構文論上はもはや主題ではなく、副詞に近い性格をもつものと言わざるをえない。このように「人間」という語が修辞上の強調として挿入的に用いられた場合を、「人間」の副詞的用法と名づけておこう。

最後に「人間、～。」というパターンで、漢文調の文がいくつか見られる。

(55) 人間万事塞翁が馬。(淮南子「人間訓」)

(56) 人間至る処青山あり。(月性「清狂遺稿一上」)

これらの「人間」は「世間」「世の中」の意である。(56)の「人間」は「じんかん」とも読む。

5. 「人生、～。」の意味・用法

「人生、～。」の場合も、基本的には「人間、～。」に似ている。用法の中心となるのは、

(57) 人生、死ぬまで勉強だ。

(58) 人生、まさに四苦八苦なの。(ゆっくり)

(59) 人生、七転び八起きだ。

(60) 人生、楽ありゃ、苦もあるさ。(黄門、主題歌)

のような、常套的な短い表現である。(57)(58)は一律的な規定、(59)(60)は多様性を表現したものである。(57)の例もそうだが、述部に動作動詞、ないしは動作動詞性の名詞が入ると、文は当為性を帯びてくる。

(61) 人生、年をとってもチャレンジ。日々燃えて仕事をしたい。(新社長)

(62) 人生、楽に生きるのが一番。

(63) 人生、自分で決めるもの。

「人生、」という主題機能の裏に潜在している格について考えると、まず(58)(59)のような形容詞述語文・名詞述語文の主格が挙げられる。次に時間範疇の名詞であることから、(60)のような位格ニ、或いはデが挙げられる。

(33) 人生、勇気が必要だ。(黄門、主題歌)

(34) 人生、勝負は後半にあり。(勝負、書名)

他に、「生きる」という動詞の対格ヲも考えられる。

(64) 人生、気楽に生きれば楽しいものさ。

次のように潜在する格が分かりにくいものもある。

(65) 言葉が豊富じゃなかったら人生、損するね。(面目)

「人生ヲ損する」の意味か、「その人は人生において損する」の意味か不明である。

次のような文では、副詞的用法とまではいかないが、「人生、～。」というパターンがかなり強引に挿入・使用されている。

(66) だけど天気の良い日でも、セールスに歩いてつまらんかったら、人生、本当につまらんで。(面目)

この文で「人生」という語が不要というわけではないが、「天気のいい日にセールスに歩く」という特定の事態の日常的な感情を、一挙にその人の人生の価値評価にまで繋げている。人間、人生、世の中の特殊主題化用法は、既に述べたように、論理的、分析的な判断でなく、経験的、直観的な判断を基本にしているため、このような飛躍が出て来る余地は十分にあると考えた方がよいのであろう。

(67) 人生、意気に感ず。(魏徴「述懐」)

という句も、それこそ人口に膾炙している割には飛躍・省略が多過ぎて、文の構造がどうなっているのか、掴みにくい。直訳的な意味としては「人生に対して、意気を感じて臨め」ということか、「(私は)人生そのものに意気を感じる」ということなのか分かりにくい。

6. 「世の中、～。」の意味・用法

「世の中」の場合は、「人間」「人生」と比較すると絶対的な使用頻度はやや小さいが、やはり「人間」「人生」と同様、短く簡明で常套的な表現が用法の中心をなしている。

(68) 「クサナギノツルギ(解散)を振るえば血路を開けんこともなかったが、世の中、できることとできないことがある……」(日録)

(69) 世の中、どこに落とし穴があるか分からない。

(70) 世の中、何が認められるかわからないわね。(自然)

(71) 世の中、もちつもたれつ。仲良くやろう。

(72) 世の中、そんなに捨てたものじゃないわ、ととてもいい気分。(ちょっと)

(73) 世の中、義理や人情だけでは渡れない。

(74) 世の中、世渡り上手が得をする。

(68) (69) (70) (74) は位格の主題化の例、(72) (73) はヲ格の主題化の例である。(71) は省略が激しくて分かりにくいだが、名詞述語文の主題化の例であろう。「世の中の原理は“もちつもたれつ”だ。」というような意味であろう。いわゆる「名詞止め」の形態をとっており、「人間、相見互い。」「人生、夢芝居。」等に共通する、標語に近い表現である。

「人間」「人生」と比べても、その意味範囲が曖昧なため、内容上、飛躍の多い表現が多い。

(75) (凶悪犯罪のニュースをテレビで見て) 世の中、恐ろしいな。

(76) 彼が生きていたら、世の中、帳尻が合わないじゃないですか。(殺人)

なお、「世の中」と同義の語として「世間」がある。日本人は昔から倫理基準としてこの「世間」の反応を随分意識して生きてきたはずであるが、それなのに「世間、～。」という表現は成立しない。どうしてであろうか。その理由は恐らく、「世の中」が4拍の語であるのに対して「世間」は3拍で、リズム感が出ないからということであろう。

7. おわりに

以上、「人間」「人生」「世の中」の特殊主題化の用法について検討してきたが、助詞抜きで、経験的・直観的に本質論、当為論を述べるこの用法は、厳密に言えば「人間」「人生」「世の中」という三つの名詞に限定されるわけではなく、ごく少数ではあるが他の名詞にも見ることができる。

(77) 政界、一寸先は闇。

(78) 政界, 何が起きてても不思議はない。

(79) 人情, 紙風船。

更に, 名詞の前に修飾語句をつけると, 特殊主題化用法が形成しやすくなる。

(80) この業界, ルールがあつてないようなものだ。

(81) 人間の世界, 片手の声が聞こえてくると一人前やね。(ゆっくり)

(82) これでは人の世, なんとでも「間」がとりにくい。(ゆっくり)

(83) 結婚生活, 壊れる時はあつけないものだ。

また, 助詞抜きと同類の表現を, 標語, CMのフレーズ, 川柳などにも見出すことができる。

(84) 北方領土正しい理解を子に孫に。(北方領土返還要求愛媛県民会議)

(85) タンスにゴン, タンスにゴン, 亭主, 元気で留守がいい。(CM)

(86) 居候, 三杯目はそっと出し(江戸川柳)

しかし単独の名詞として, 広く一般的に特殊主題化用法が認められるのはやはり「人間」「人生」「世の中」の三つの名詞に限定されるといいだろう。もっとも, 「人間」「人生」「世の中」という名詞が常に特殊主題化用法にのみ用いられるというのではもちろんない。

(87) 人間は考える葦である。(パスカル『パンセ』)

(88) 地球環境がこれほどまでに悪化したのは人間が悪いからだ。

(89) あいつ, 最近, 人間変わったな。(ガの省略)

(90) 人生は地獄よりも地獄的である。(侏儒)

(91) 四十そこそこの人生に疲れ果てて, 息を引きとったのである。(鬼平8)

(92) 世の中は三日見ぬ間の桜かな (『蓼太句集一春』)

(93) いいかげん, 世の中が退屈になった。(鬼平7)

参 考 文 献

- (1) 久野 暉 (1983)『新日本文法研究』大修館書店
- (2) 寺村 秀夫 (1978)『日本語の文法(上)』国立国語研究所
- (3) 寺村 秀夫 (1981)『日本語の文法(下)』国立国語研究所
- (4) 松下大三郎 (1930)『標準日本口語法』中文館書店
- (5) 駒田信二・常石茂編 (1975)『中国の故事と名言500選 上巻』平凡社
- (6) 尚学図書編集 (1986)『故事ことわざの辞典』小学館
- (7) 鈴木一雄・外山滋比古 (1988)『日本名句辞典』大修館書店
- (8) 杉本 和之 (1983)「『は』と『が』一話し手(私), 聞き手(あなた)の場合」『日本語教育 52号』日本語教育学会

(1997年9月30日受理)